

〈実践・調査報告〉

地域との連携の必要性と課題

— 保育者養成大学における「地域子育て支援団体との協働事業」の視点から —

木村 美知代

I はじめに

現代社会は、親が子育てに困ったり親身に相談する相手がいなかったりと、子育てを身近な人から聞く・助け合うなどの機会や地域とのつながりが希薄化していると言われている。乳幼児は地域とのかかわりの中で、家庭だけではできない多様な体験をしたり友達とかかわり楽しさを味わったりする。地域における子育て支援は、現代社会の幼児教育にとって非常に重要な課題である⁽¹⁾⁽²⁾。

同朋大学では、地域の核となり、乳幼児の生活体験を豊かにし、人々をつなぎ、声をかけあえる地域づくりに貢献することを目指して、年間40回の子育て支援「キッズカレッジ」を実施している⁽¹²⁾⁽¹³⁾⁽¹⁴⁾⁽¹⁵⁾。また、「キッズカレッジ」で学生は、親子へのかかわり方や乳幼児が様々な体験や友達とのかかわり方を学び、親の子育て力を高めるとともに、コミュニティーの担い手となり、地域と共に協働し合う子育て支援を体験している。

そこで、「キッズカレッジ」に参加した親の心理や不安、学生・教員・地域子育て支援団体が親との触れ合いのなかで果たしてきた役割を探り、大学の子育て支援活動が親の子育て力回復と向上に役立つことができたかを明らかにしたい。

これらのことは、本大学が地域子育て支援団体と協働する必要性を探るとともに、今後の大学における子育て支援活動の役割と可能性の一端を明らかにすることができると思われる。

II 研究方法

- ① 2011年度前期「キッズカレッジ」の1回目に、大阪レポート^③・兵庫レポート^④を参考にアンケートを作成し、子育て不安についての実態調査を行った（参加者126名、回収数79、回収率60%、対象保護者89名）（以下「コース参加者」とする）。
同様の調査を2011年10月2日に特別企画Ⅲに参加した地域の保護者（参加者148名、回収数77 回収率52% 対象保護者185名）（以下「特別企画参加者」とする）にも行い、両者の結果を比較する。
なお、「コース参加者」と「特別企画参加者」に重複参加した保護者は26名である。
- ② 2009年度後期と2010年度前後期、2011年度前期に実施した4回の調査（参加者289名 回収数197 回収率68%）から、親の意識の変容を読み取る。
- ③ 2011年度前期「キッズカレッジ」A・Bコース参加者の自由記述「意見や要望」や「問い合せ」などから、地域との連携の必要性や大学の役割を探る。

III 研究結果

1 「親の子育て不安」についてのアンケート調査

(1) アンケート調査結果

2011年開催キッズカレッジA・Bコースに参加した親子の70名全員が、

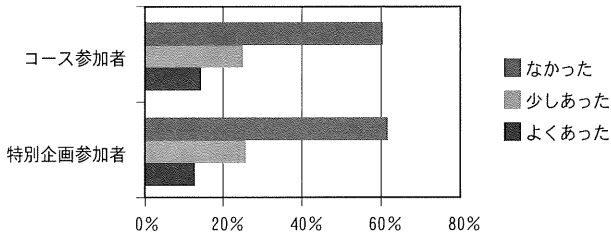
昨年度後期参加者だったので、4月Aコース・5月Bコースの参加者のアンケートは、昨年度の結果として「コース参加者」とした。

また、10月2日に実施した特別企画Ⅲには、地域の0～3歳児の親子151組が参加した。その時の113世帯を対象に調査した結果を「特別企画参加者」とし、両者を比較検討することで、分析を試みた。

なお、Q6は2011年度のみに行った調査内容である。

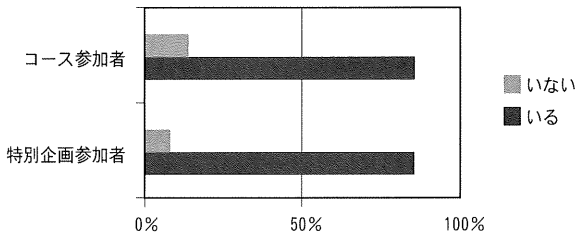
Q1 あなたはご自分の子どもが生まれるまでに、他の小さい子どもさんに食べさせたり、おむつを替えたりした経験はありましたか

図1 小さい子と触れ合った経験について



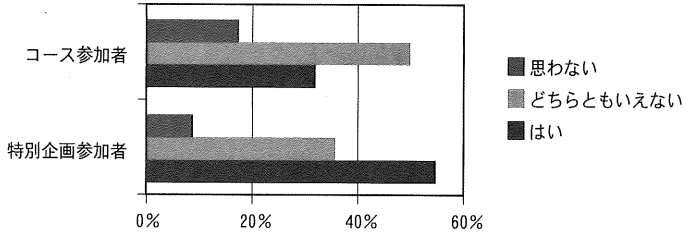
Q2 近所にふだん世間話をしたり、赤ちゃんの話をしたりする人はいますか

図2 話し相手について



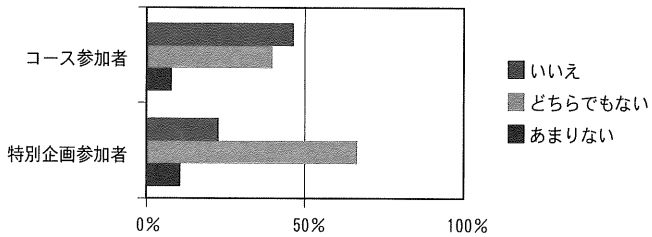
Q 3 子育てをたいへんと感じますか

図3 子育ては大変と思う



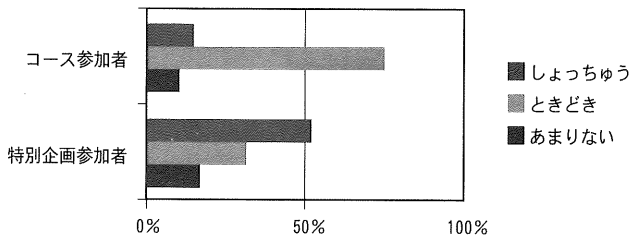
Q 4 育児のことで、今まで心配なことがありましたか

図4 育児で心配なことについて



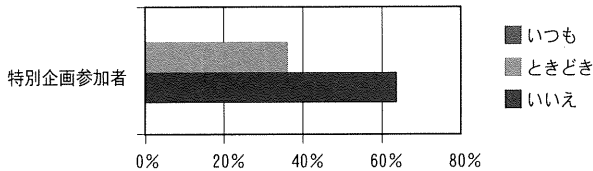
Q 5 育児でいらいらすることは多いですか

図5 育児でいらいらするか



Q 6 お子さんを叱るとき、たたく、つねる、けるなどの体罰を用いますか

図 6 叱るときの体罰について



(2) 結果

- ① 自分の子どもを生むまでに、小さい子どもとの接触経験がまったくないままに母親になる人が多く、この傾向は 1980 年大阪レポートでは 41%⁽³⁾、2003 年神戸レポートでは 56%⁽⁴⁾であったが、今回の調査ではさらに小さい子どもと触れ合うことなく親になった人が多いことが分かった (図 1)。

平成 20 年に改訂された幼稚園教育要領⁽¹⁾や今回改定された保育所保育指針⁽²⁾、教育基本法の改定など、生きる力の基礎を培う見直しがあった原因の一つに、核家族化・少子化の流れの中で、母親だけで育てる子育ての孤立化が問題になった。しかし、本大学の子育て支援に参加者の 86%が、誰かと話していることから、子育てについて話ができる相手が「いない」親は少なく、子育て家庭の孤立化が治まっている様子が伺えた (図 2)。

「子育ては大変」と訴える親が 32%と少なく、「どちらとも言えない」が 50%と多い。このことから、「キッズカレッジ」に参加した親は他の親子の様子を見たり、他の親の考えを聞いたりして、子育てを楽しむ余裕をもつことができたと思われる。キッズカレッジに参加しようとする親は様々な機会を活かして確実に子育て負担感を解消していったと考えることができる (図 3)。

「子育てで心配なことがあった」親は46%と多く、子育てについての不安感を抱いていることが分かった。子育てで心配なことがあるので誰かに教えてほしいからキッズカレッジに参加したことが伺える(図4)。

育児でいらいらすることは多いですかの調査も同様の傾向がみられ、「ときどきイライラする」と答える親が75%いることから、ときどき子育てが分からなくなり、分からないからイライラするのではないかと推測できる(図5)。

子育てについての不安感やイライラ感を解消するためには、親のように親身になって考え、話を聞いたりして、子育ての先輩として助言できる存在が必要になると考える。

その反面、地域に住む親は「子育ては大変」と訴える親がコース参加者と比べて多く、「どちらとも言えない」「いいえ」が少ないことから子育てに相当な負担感を感じていることが分かった。大阪レポートや神戸レポートと同様に、子育てに対する負担感は解消されていないことが分かった。(図3)

また、育児で心配なことがありましたかの問いに「はい」が22%と少なく、「どちらともいえない」が67%と非常に多い(図4)。おそらく、心配な事を自分で処理しようとする傾向や何らかの形で解消していると思われる。ところが、「しょっちゅうイライラ」する親が75%と非常に多く、「ときどきイライラ」する親31%を合わせると89%の親がイライラ感を抱いていることが分かった(図5)。

これらのことは、特別企画参加者の親は身近に聞いたり見たりする機会が少なく、自分の状況を客観的に把握できないため、子育てで心配なことが起きても自分で解決できず、生活や方針が落ち着かないまま、しょっちゅうイライラと過ごしているのではないかと推測される⁽³⁾⁽⁴⁾。

特別企画参加者の親に叱るときの体罰を聞いたところ、ときどきだが、38%の親がたたく、つねる、けるなどの体罰を用いていることが分かった(図6)。特別企画参加者の親は、しょっちゅうイライラするなど、子育てに負担感を感じていることが理解できた。

- ② キッズカレッジには、様々な問い合わせがある。その中に、今回の特別企画Ⅲ2011「ミニSLにのりましょう」で「自分がFAXを送信したときに、開催責任者の教員がその場で受け取らないことが不満である。担当の大学教員が申込みを受け取り、すぐに申し込み者へ返信すべきではないか」と、事務に長時間不満を訴える親がいた。

苦情電話を繰り返した親は、「子育て担当の大学教員は、将来、自分の世話になることを分かっている」「大学教員が子育て支援をさせて下さいと頼むべき」などと、子育て中の親である自分を大切にすることを要求していた。

おそらく、「子ども手当」や「子育てサロン」「子育て支援センター」や「夜間保育」などの24時間対応サービスを常に消費する立場に立つ側と、提供する側に対しての境界線がなくなるバウンダリー現象が起きていると思われる⁽⁵⁾⁽⁶⁾。周囲が自分のためにしてくれて当然と思い、「周囲の状況を判断して自分の行動を押さえ」たり、「共に生活する視点を感じ」たりすることができず、対立構造で相手を捉えがちになっていたのであろう⁽⁷⁾。

学校や行政など言いやすいところに無理難題を言うモンスターペアレントのような親がキッズカレッジにも現れたと考えられる⁽⁸⁾。

2 活動後の調査(五折式)からみた親の意識

(1) アンケート調査の方法

- (ア) 調査方法 2009年度後期と2010年度前後期、2011年度前期に実施した4回の調査(参加者289名 回収数197 回収率68%)から、

親の意識の変容を読み取る。

(イ) 調査項目

- ① 質問項目1 参加後の感想 (a. とてもよかった b. よかった
c. どちらでもない d. あまりよくなかった e. よくなかった)
- ② 質問項目2 参加後の「感想や意見、要望」を自由記述で述べる。

(2) アンケート調査結果

表1 参加後の親の意識 (2009年後期～2011年前期)

		a	b	c	d	コメン ト数	コー ス数	回数	参加 世帯	回収 当日	回収 数	回収 率
2009	後期	84%	16%	0%	0%	15	0	7	31	31	31	100%
2010	前期	71%	29%	0%	0%	86	5	11	68	67	47	70%
	後期	78%	23%	0%	0%	152	7	13	66	65	40	62%
2011	前期	61%	39%	0%	0%	111	11	22	237	126	79	60%
2010特別企画ミニSL		54%	45%	5%	0%	149	1	1	238	150	96	64%
2011特別企画ミニSL		70%	24%	7%	0%	121	1	1	153	115	46	40%
2011特別企画I・II		65%	45%	0%	0%	111	2	1	120	100	48	48%

- (ア) 質問項目1 参加後の感想 (a. とてもよかった b. よかった c.
どちらでもない d. あまりよくなかった e. よくなかった)

前期・後期計4回実施した後の評価がaの値が次第に低くなり、参加者の大学に対する期待が厳しくなっていることが分かる。

その理由を推測すると、希望する保護者が参加する形式(2009年度)から、5コース(2010年度前期)7コース(2010年度後期)11コース(2011年度前期)と、参加方法を変更してきたことがあげられる⁽¹²⁾⁽¹³⁾⁽¹⁴⁾⁽¹⁵⁾。参加保護者は、前年度や他コースの開催内容と比較したり、他の子育て支援団体が開催する内容と比較したりなど、様々な子育て支援に参加し比較することができるようになった成果ではないかと考えられる(表1)。

地域との連携の必要性と課題

これらの結果から、本大学の子育て支援活動に繰り返し参加したり、他の子育て支援活動に参加したりしたことで、何らかの意識の高まりが見られるようになったと考えられる。

特別企画の中でもミニ SL の活動では 2010 年度 54%、2011 年度 70% が a を評価した。

その理由を推測すると、2010 年度は中心となる指導者と協力する教員計 2 名が参加を希望する学生と企画運営したが、2011 年度は 4 ゼミの教員と、全体指導する教員、当日学生を見守る教員など、子ども学教員全員がかかわった。学生と教員相互の連携を中心に心がけたことが評価されたと思われる⁽¹¹⁾⁽¹²⁾⁽¹³⁾⁽¹⁴⁾⁽¹⁵⁾。

(イ) 質問項目 2 参加後の「感想や意見、要望」

2009 年度からのアンケートの自由記述のコメント「意見や要望」数は、2009 年度に 15、2010 年前期に 86、後期に 152、2011 年度は 125 と増えていった。

2009 年度からの 4 回実施した後のアンケートで、自由記述の内容を企画・運営、学生の対応、ボラの対応、教員の対応、親自身のこと、その他に分けてそれぞれを分析した。

2011 年度前期参加者の記述は 125 あり、以下はその概要の抜粋である。

表 2 2011 年度「感想や要望、意見」

企画・運営： 31%	定期的特別企画があるので、嬉しい。2
	先生方と母親が話す時間のプログラムの方法がとてもよい。3
	母親たちと意見交換・悩み・質問などがためになった。8
	コースによってテーマがあって、いろんな体験ができ、親も楽しめとても勉強になった。3
学生の対応： 47%	声をかけてくれる学生がだんだん増えて「かべ」が薄くなってきた。23
	子どももたくさんの学生や、友達と触れ合うことができ楽しかったようです。36

ボラの対応： 2%	ボランティアリーダーの方によく遊んでもらって良かった。2
教員の対応： 7%	先生からの話がとても勉強になった。6
	子どもとの接し方、遊び方などいろいろ教えていただき参考にしたいことがいっぱいだった。
	年齢に合った経験したほうがよいことなどをさらに詳しく教えてほしい。
親自身について：13%	4回の教室で子どもの成長を感じることができた。8
	自分の子育ての仕方の見直しが見直しができた。子どもの行動を見ることができた。2
	子どもが動き回って先生のお話がゆっくり聞くことができなかったので残念。
	毎回座りこんで話しこんでしまい、子どもがやきもちをやいて私から離れなくなってしまう。
	普段他の子どもと遊ぶ機会がない。社会性や協調性を身につけたい。参加してよかった。
	今日初めて参加したが、親も楽しめたのでよかった。

(ウ) 2011年度「感想や要望、意見」からの結果

- ① 「たくさんの方が学べた」「先生の話が参考になった」「他の親子の貴重な意見が聞けた」「自分の子育ての仕方の見直しが見直しができた」「子どもの行動を見ることができた」「先生方と母親が話す時間のプログラムの方法がとてもよい」など、参加して良かったことを書く親が多くいた。

これらのことから、キッズカレッジに参加することで周りとの接触が生まれ、不安な状況を解消し、大学教員や他の親との話し合いを参考に、周りの状況を知ることができたので、自分の子育てを客観的に把握することができたことが分かった。

- ② 「不安や孤独で押しつぶされそうになったことがありましたが…終わってから一緒に話す友人もでき…4回の教室で子どもの成長を感じることができました」と、子育て教室に参加する前の自分を振り返り、「子育て生活をともに楽しもうと他の親と相互交流する」意欲をもつ様子が書かれていた。「つい、周りの子と比較して

叱ってしまい…」と、周りを過度に気にしたり「自分がしっかりしなければ」と不安にさいなまれたりしていたこと書く親も、キッズカレッジに参加したことで話し相手が見つかったり、教員を交えた話し合いの中で不安は解消したりしたことが書かれていた。

これらの記述から、気心が許せたり親身になって話したりなど「共に生活する楽しさを味わう」ことが、親の気持ちにゆとりをもたせるために重要になることが理解できた。

- ③ 学生のかかわりに対して「一生懸命」「優しく接してくれた」「楽しく・根気よくかかわっていた」「上手に遊んでくれた」と、学生を認める記述が多かった。「学生の人数が多くて、対応が丁寧。もっと積極的に子どもにかかわってもらえるとさらに嬉しい」と、「教育現場をよくしていくためには、学生を育てよう」と、共同責任であることを意識する親も多くいた。学生がいたから、自分の子育ての問題意識をもつとともに、子育てに自信や余裕をもって参加することができたと思われた。

(エ) 2009年度から2011年度までの「感想や要望、意見」から

自由記述の内容は、2009年度は「学生にもっと遊んでほしい」などの要望が中心だったが、2010年前期は「大学教員の意見を聞きたい」。後期は「親も心から楽しみたい」。2011年度は「自分を振り返り、親子で楽しむために交流したい」と、大学に要望しつつ、次第に自分を見つめ積極的な子育てをしようとする内容の変化が見られた。

「最後にみんなで歌ったりするコーナーがうちの子は大好きです」と、親が学生や子どもと一緒に楽しみ、「多くの学生やボランティアの方々に遊んで頂くことはなかなか無いのでとてもよい経験になりました」と、我が子の子育てを子育て体験がある人にしてもらう様子を身近で見たり聞いたり、他の子どもの様子を見ることで、「自分の子どもは結構う

まく育っている」と感じ、「先生の話が参考になった」と大学教員や学生、ボランティアリーダーとのかかわりが重要な役割を果たしていたことが理解できた。

また、近隣の保育園児と、走り回る我が子と比較し「しっかりしていますね」「うちの子もあんなってほしいわ」と、目標をもつ様子から、園児との触れ合いの必要性も理解できた。

これらの様子から、従来の子育て支援は講演会や相談事業、観劇会など、「親子をお客さんとして招く」スタイルから、「親が楽しみながら」子育てについて学ぶ機会の提供に変化してきたが、さらに「親が楽しみながら学ぶ」ことが必要になることが理解できた。

さらに、そこで経験したことを家庭に帰ってから、楽しみながら取り入れることができる内容や、親と一緒に遊んで楽しみたくなるような遊びの提供が求められていた。親に注文したり指導したりと親の気持ちを追い込むのではなく、ボランティアリーダーや学生が楽しんだり、他の子どもや園児が遊ぶ様子を傍らで見たり他の親の子育てを聞いたり、教員が親身になって相談したりして、親が自分を客観的に見つめるスタイルを取り入れることで、親自身が子育て力をつけていくことが重要になると思われる⁹⁾。

IV 地域との連携の必要性と課題

(1) 地域との連携の必要性

キッズカレッジの調査結果から、大学周辺の地域に住む親は、区内に様々な子育て支援活動がありながらも、しょっちゅうイライラするなど、子育てに負担感を感じ、時には体罰さえ使っていた親も少しではあるがいた(図6)。また、周囲が自分のためにしてくれて当然と思い、無理難題を言うなどの現象も見られた。周囲の子育て中の親子の状況を知る機会を自

分から求めないと、自分の状況を客観的に把握できず、追い詰められたりしての結果と思われる。親が誰かと共に助け合う経験がなく、一人で子育てしてきて、自分でなんとかしなければならぬと親自身が追い込まれた状況にあると、協働するプロセスや力が備わりにくくなるだろう⁽¹⁰⁾。

本大学の子育て支援に参加した親は、大学教員や地域の子育て団体のリーダーなど人生の先輩に聞いたり教えられたりして、親身に相談してくれたり、他の親子の様子や学生がかかわる様子を見たりしていることで、子育て不安を解消し、子育てを楽しむようになっていった様子が伺えた。

子育て支援活動には、大学教員やボランティアリーダーなど経験者による「温かいまなざしと声かけ」の協力と、親が中高生や大学生、幼稚園・保育園・小学生などに教える次世代育成の立場になって子育てを教える地域との連携が効果的だと思われる。親が安心して子育て支援に参加し、親が自分も役に立つことができると実感できると、ゆとりと潤いのある関係性を育むことができる。子育て中の親子への支援活動が地域と行政と教育関係団体をつなぎ、親も参画して、互いに協働するプロセスや力を生む重要な役割があると考えられる。

(2) 地域と共に育つ学生を育てるための課題と現状

本大学キッズカレッジでは、今年度から「地域子育て支援団体・サークルと大学との協働」事業を開催している。これはまさに、常設の場がない大学がシステムづくりによって「子育てを孤立させない」地域子育て支援を実現させるための提案である。

① 本大学の実態からのシステムづくり

本大学には、指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について掲げられている「演習室、実験室、実習室、教育上、研究上必要な種類及び数種の機械、器具及び標本その他の設備、更衣室」などの施設が整っていない。常設する場がないので展示場「ギャラリーDo」で行おうとしたが「授業で

は使用できない」という使用規約があった。

そこで、授業がない学生を対象に「キッズカレッジ」を開催することにした。その結果、学生が率先して時間をやりくりしあうようになり、学生や教員の意欲をさらに高めることになった。

② 公開講座を毎回実施

「ギャラリーDo」を使用するためには、毎回公開講座を実施することになった。このことが却って参加者から好評を得た。参加した親はアンケートの中で「先生方と母親が話す時間があるプログラムの方法がとてもよい」「母親たちとの意見交換・悩み・質問などがためになった」と大学教員の子育てについての講義や互いの話し合いのなかで、「自分の子育てに役立てることができる」と、自信をもって子育てする楽しさにつながった様子が見られた。

また、「コースによってテーマがあって、いろんな体験ができ、親も楽しめとても勉強になった」と、各教員の専門分野を学ぶ楽しさを実感する様子が伺えた。

③ 大学教員の協力

1年生を中心に開講したキッズカレッジは、保育内容「表現」・「環境」・「健康」・「人間関係」・「言葉」などを指導する教員と児童相談所などの現場経験がある教員で担当し、前期「子ども学総論」と後期「子ども学演習」に組み入れ、現場体験ができる機会となった。

3年生中心のキッズカレッジは、1年生中心の教員に加えて高齢者施設や中学校の現場経験や臨床心理士の資格がある教員が加わり、キッズカレッジの親子のかかわりを気付きノートやPDCAサイクルの自己評価で検証し、教員に対する質問をロールプレーで再現するなどを取り上げ、ゼミ指導に役立てた。

子ども学専攻教員全員と社会福祉専攻教員の協力により、学生にもボランティア団体にも、子育て親子にも充実する機会となった。

④ ボランティアリーダーとの協働の成果

i ボランティアリーダーから託児を学ぶ

教員が公開講座を行う間は、親子へのかかわり方を学生に見せて指導することができない。そこで、NPO ボランティア団体(注：親子支援活動している NPO 法人)や子育てサロン(注：未就園児親子が集う場を民生児童委員が行政の支援で提供)、子育てサークルの指導者(注：親子支援活動の協力者団体)、民生委員などを毎回 3 名程度確保し、下記の託児を開始した。

表 3 キッズカレッジの流れ

9 : 50～受付
10 : 00～好きな遊び (おもちゃ・製作・運動遊びなど)
10 : 30～託児と公開講座
11 : 00～11 : 30 みんなで遊ぼう (集団指導)

ボランティアリーダーの「温かいまなざし」で、子どもが遊び始め、ボランティアリーダーに抱かれたりなどから、親子が安心していく様子を学生が見ることができた。ボランティアリーダーの「何気ない世間話」で「ちょっとした相談」が始まるなど、「声かけ」が親子を落ち着かせる雰囲気を醸し出すことも理解できた。学生の近くでボランティアリーダーが託児することで、学生は具体的なかかわり方を見ることができ、学生も自分からかかわる意欲やその手立てを見つけ、自分から動き出す姿を見ることになった。

ii ボランティアリーダーから集団指導を学ぶ

1 年生は、1 週間前の授業で、ボランティアリーダーとみんなで遊ぼう (集団指導) の打ち合わせを 30 分間行った。19 名の学生が 30 分間に集団指導する内容を教えるボランティアリーダーの手際の良さに、気持ち良く指導を受けることができた。日ごろの理論が難しく感じる学生や自

分で考えなければならぬ煩雑さに辟易している学生も、自分たちが親子の前で発表する内容をボランティアリーダーが次々と提案し、それを覚え、演技する楽しさに引き込まれていった。

その時教えてもらった手遊びやリズム遊びを1週間後に自分たちが親子の前で発表するプレッシャーも重なって、非常に充実した時間を過ごすことになった。

iii ボランティアリーダーを交えた反省会から様々なことを学ぶ

学生は、11:30～片付け、その後は事後反省会、午後の授業に出席のため昼休み中の作業は手早く進み、次会についての相談を行うことができた。

ボランティアリーダーは学生たちの率直な気持ちを聞くことができ、自分たちの考えが学生に受け入れられ、役立ったことに気づき、遣り甲斐につながったと語った。また、学期末に書かせた学生レポートから、ボランティアリーダーの語り方や声の大きさ、手振り身振り、前に立ったときの自信の持ち方などの様々な学びがあったことや実習で生かそうと参考にしていたことを知り、さらにキッズカレッジに好感をもち、より協力的になった。

ゼミによっては、NPO ボランティア団体で再度指導を受けたり、NPO ボランティア団体でボランティア活動をしたりなど、積極的にボランティア団体で学ぼうとする学生も現れた。また、出前キッズカレッジで自分たちの集団活動や託児の能力を高めようとして出張する学生もいた。ボランティアリーダーと学生と教員の3者の、事前打ち合わせ、実施、事後指導は互いに思いを語り合い、新しい企画を互いに考え、内なるパワーを育み合うよい刺激となり、相互の意欲を高め合う効果があった。3者間の関係性が潤沢であるほど、「子育てを孤立させない」システムづくりが充実すると考える。

(3) 地域と共に育つ学生を育てる大学の役割

① 学生・教員・団体、それぞれが価値観を共有し合う

学生はボランティア団体・サークルから現場体験を学び、就業後に向けて自分たちの力を高めようとしている。大学教員は保育に関する公開講座を行うために新たな分野を開拓することになる。ボランティア団体は学生や子育て中の親子に役立つかわりに気付き、新たな活動を開発しようとする。参加した乳幼児は学生とかわかることで、異世代との出会いや様々な体験を楽しみ、親は学生と我が子をかかわらせることで自分の子育てに自信をもつなど、いままでの価値観に変化を見せ、「共に活動する楽しさ」や役立つ喜びなど「共に生活する楽しさ」を味わっている。

この価値観の関係性を、キッズカレッジの運営責任者が絶えず意識して、3者に伝え、気付かせ、互いの成長やこれからの自分たちが創造できるように関わっていくことが協同のポイントと考える。つまり、それぞれがもっている内なるパワーを育み、それぞれ、自分たちが考えたことを実践し活動的に動く心地よさが重要になる。それぞれが機能していくプロセスを意図的に進める大学教員の関わりが重要になるのである。

具体的には、学生は毎時のレポートで学びを再確認する。ボランティア団体は「学生のレポート」から充実感を感じとったり、教員から聞いたりする。教員同士が親のアンケート内容を共有し合い、活動の充実感を味わったり研究に生かしたりする。それぞれが価値観を共有し合うことをさらに充実させることが重要になると考える。

② ボランティアリーダー研修会

「子育て支援団体・サークルと大学の協働事業」として講師を招聘し、本大学教員とともに、ボランティアリーダーと学生に対して研修会を開催・計画している。

表 4 2011 年度 ボランティアリーダー研修会

1 回目：4 月 18 日 (月) 13：00～	「製作」「手遊び・リズム遊び」「パネルシアター・エプロンシアター・紙芝居」など指導内容の情報交換
2 回目：8 月 2 日 (土) 10：00～	人形劇団指導者から演技のポイントを学ぶ
3 回目：10 月 20 日 (土) 10：00～	幼児も高齢者も楽しむイキイキ体操遊び
4 回目：10 月 8 日 (土) 10：00～	子どもが大好き！手遊び・歌遊び♪
5 回目：10 月 26 日 (水) 14：00～	新聞紙を使って遊びましょう
6 回目：11 月 2 日 (水) 14：00～	運動遊びを楽しみましょう
7 回目：11 月 5 日 (土) 10：00～	乳幼児や小学生が楽しむ、手づくりおもちゃ
8 回目：12 月 21 日 (水) 14：00～	リズム遊びを楽しみましょう
9 回目：1 月 12 日 (土) 10：00～	手づくりおもちゃを楽しみましょう
10 回目：1 月 21 日 (土) 10：00～	高齢者も楽しむことができるイキイキ体操遊びと手づくりおもちゃ

民生委員・主任児童委員などは自分たちの子育てサロンを少しでも良くしようと目的をもって参加していた。しかし、子育てサロンは近隣の保育園や幼稚園の先生方に託児や集団活動を依頼して自分たちは準備・受付などの世話係で開催している。その方たちの参加人数が次第に減ったことからボランティアリーダー研修会は役立たなかったのではないかと反省した。

むしろ、それぞれが活動している実態から、当事者が困っていること、例えば「物を投げる子にどうかかわったらよいか分からない親」に、ベビーシッターのように一緒にかかわりながら子どもの意識を変える活動をする。また、兄弟の味を知らせたい親に、他の親を紹介して「他の子どもと一緒に食事や風呂に入ることを交互にする」当事者間の交流の橋渡しをするなど、活動の具体例を紹介する研修会を開催し、それぞれを知らない実態から限界を含めて実態に気付き調整する役割をボランティア団体や学生が活動する提案やサポートをボランティアリーダー研修会ですべきではないかと考えた。

IV 今後の課題

本大学における子育て支援の役割は、まず会場の提供と考える。

学生も子育て中の親子も、ボランティア団体も、困ったとき、進んで参加しようと思ったとき、誰かに支えてほしいときにいつでも迎えてくれる場があるからこそ、安心して集い、充実した学びが保障される。本大学にはピアノ練習室や運動できる体育館、実技実習室と共に、子育て支援教室もない。今後は、保育者養成大学の使命として、常設の会場確保にむけて努力しなければならない。

次に学年に応じた段階的な指導プログラムを工夫する必要がある。

1年生のキッズカレッジは、ボランティア団体・サークルと協働で企画・開催している。そのため、各ボランティア団体は学生を指導する責任が求められ、やりがいをもって取り組んでいる。ボランティア団体が活動の良さを大学教官から認められ、その嬉しさから一層頑張ろうと内なるパワーが湧くように働きかけたり、ボランティア団体・サークルそれぞれが新しい役割を発見して取り組もうとするように、大学教官がスーパーバイザーの役割を果たしたりすることが重要になる。

2年生のキッズカレッジは、現在母体となるゼミ授業の学生がいないので、ボランティア団体や学生自身が自分たちの企画を実現できるシステム作り（ボランティア活動、またはインターンシップの授業を開講など）に取り組む必要がある。また、2年生が1年生の体験を生かして新たな企画を思いついたりそれに参加しようとしたりするような、新規事業の開催とそれを具体化していく支援が求められる。

3年生のキッズカレッジは、学生の企画に親が楽しむことができる内容（親自身が身体を動かし心を動かして楽しめるリズム遊びや活動の紹介）や、親が学ぶ喜びを楽しめる内容（親の読み聞かせや親が企画・実践するシステムづくりなど）を充実させる必要がある。

学生はキッズカレッジでの親子へのかかわりを学び、将来就業後に親の意識を高めるための挑戦的課題や創意工夫の課題などを巧みに組み込む企画の具体的な活動を体験したり、新たな方策を工夫したりする支援が必要になる。さらには、親自身がコミュニティの担い手となるようにするための指導のありかたを経験させたり気付かせたりしなければならない。

そして、多くの母親は子育てについて話ができる相手がいる一方で、子育て支援関連に参加しない母親の二極化が進み、子育て支援活動に参加しない子育て家庭の孤立化が深刻になっていると危惧される。

現在は4年生が子育てサロンに「出前キッズカレッジ」を行っているが、今後は、地域子育て支援を展開するために学生が家庭にベビーシッターのように訪問することで子どもの実態を把握し、子どもとのかかわりを深めるなど、大学独自の企画を工夫し、連携を強化することが求められる。行政や民生委員と連絡をとって、キッズカレッジに参加しない乳幼児を学生が誘ってキッズカレッジや公園で遊ぶなどの手立ての工夫も考えたい。子育てサロンの活動を民生委員・主任児童委員に頼るだけでなく、元気な独居老人が学生と共に遊び道具を運搬したり一緒に遊んだりなどして、キッズカレッジや家庭でのベビーシッターに参加し協同する異世代間交流事業の工夫も考えられる。学生と独居老人が交流することで、自分たちの役割がさらに見え、限界にも気づき、自分たちの地域に限らず他の地域の応援に出かけることも可能になる。

最後に、大学周辺の地域には行政や団体、NPOなど60か所以上の子育て支援活動が行われている。それぞれの団体がそれぞれの実態に気づき、それを調整する役割がそれぞれの団体にあることを提案することも、大学が現在取り組んでいる「文部科学省平成23年度大学改革推進等補助金『大学生の就業力育成支援事業』」の中で行っている『地域子育て支援団体・サークルと大学との協働』に求められていると考える。そのためには、今までにない企画を工夫し、それを実践したいと思う学生の内なるパワーを育くむことが重要になる。

地域との連携の必要性と課題

引用・参考文献

- (1) 厚生労働省 (2008) 保育所保育指針解説 フレーベル館
- (2) 文部科学省 (2008) 幼稚園教育要領 フレーベル館
- (3) 原田 正文 (1991) 「乳幼児の心身発達と環境」—大阪レポートと精神医学的視点 名古屋大学出版会
- (4) 原田 正文 (2006) 「子育ての変貌と次世代育成支援」—兵庫レポートにみる子育て現場と子ども虐待予防 名古屋大学出版会
- (5) 内閣府政策統括官 (共生社会政策担当) 少子化対策 (2011) 平成 23 年度版「子ども・子育て白書」
- (6) 小野田政利 (2006) 「悲鳴をあげる学校」 旬報社
- (7) 槇野海治・山野則子 (2009) 「児童福祉の地域ネットワーク」 相川書房
- (8) 山野則子 (2009) 「子ども虐待を防ぐ市町村ネットワークとソーシャルワーク」 明石書店
- (9) 棚橋雅子・白石淑江(1997) 「親と子のメンタルヘルス」 中央法規
- (10) 鈴木佐喜子 (2008) 「格差が拡大する中での親の生活・労働実態と子育て」 保育研究所編「保育の研究」No.22.2008年3月
- (11) 目黒達哉・木村美知代 (2011.3) 「大学を拠点としたともに生きる地域社会の構築～子育て支援活動を基盤とする教育実践の展開」報告書 日本私立学校振興・共催事業団 私立学校等経常補助金特別補助対象事業 学校教育の高度化・個別化支援メニュー群 平成 20 年度 教育・学習方法等支援
- (12) 同朋大学ホームページ http://www.doho.ac.jp/event/kidscollg2011_late.html (2011) 子ども学専攻 親と子のキッズカレッジ
- (13) 木村美知代 (2011.1) 「保育士養成大学における学内子育て支援の意義」同朋福祉第 17 号 (通巻 39 号) 123～141 頁
- (14) 木村美知代 (2011.5) 「学内子育て支援における学生の学びと指導の改善」—学生の自己変革を高める指導方法の探究—日本保育学会 第 64 回大会 発表要旨集 394 頁
- (15) 木村美知代 (2011.9) 「保育士養成大学におけるボランティア活動」全国保育者養成協議会 第 50 回研究大会 研究発表論文 464～465 頁

(本学准教授：保育内容・幼児の教育課程)